

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌



KEIWA

COLLEGE REPORT

第45号

January 2006

敬和カレッジ・レポート

発行/敬和学園大学後援会
敬和学園大学広報委員会



敬和ふれあいバラエティ (大好評だったマツケンサンバ)

CLOSE UP

「首都ワシントンで見た アメリカの『もう一つの顔』」

英語文化コミュニケーション学科 中村 義実

第15回 ふれあいバラエティ/敬和祭のご報告
スピーチ・コンテスト/キャロリン セミナー&コンサートのご報告
人気授業「日本近現代史」/新潟県中越大地震から1年
15周年記念行事のご報告/オープン・カレッジのご報告
まちの駅「まちカフェ」/入学試験のご案内

2006



敬和学園大学は、開学以来キリスト教主義大学として、新発田市内の施設等を訪問し、讃美歌を歌う「クリスマス・キャロリング」を行っています。

12月16日、教職員・学生あわせて総勢19名で、県立新発田病院、新発田教会にて、キャロリングを行いました。小雪の降る中、病院を訪問した後、最後に新発田教会でいただいた暖かいお茶とお菓子でのもてなしは、学生の身体と心を暖めてくれたことと思います。夕方からのクリスマスパーティーは、キャロリングのメンバーを交えて大いに盛り上がり、2005年最後の行事を締めくくりました。

もくじ

CLOSE UP 「アメリカの『もう一つの顔』」中村義実 … 1	1・2年生保護者懇談会のご報告 …………… 9
ふれあいバラエティのご報告 …………… 4	15周年セミナー「住民参画型のまちづくりを考える」ご報告 … 10
敬和祭のご報告 …………… 5	15周年講演会「あなたは戦争を知っているか」ご報告 … 10
外国語スピーチ・コンテストのご報告 … 6	2005年度オープン・カレッジのご報告 … 11
キャロリンセミナー&コンサートを終えて … 6	寄付者ご芳名 …………… 11
人気授業「日本近現代史」 …………… 7	ときどきオープン「まちカフェ」 …………… 12
加納先生著書「戦後史とジェンダー」のご紹介 … 7	2006年度 入学試験中間報告 …………… 12
中越大地震から1年 ぼちぼちいこか新潟 … 8	学事予告 …………… 12
教養リフレッシュ・リトリートのご報告 … 8	キャンパス日誌 …………… 13

<表紙写真>「敬和ふれあいバラエティ(マツケンサンバ)」

ハロウィーン気分であみなで仮装し、施設の方々を迎えました。

首都ワシントンで見た アメリカの『もう一つの顔』

英語文化コミュニケーション学科 中村 義 実



●凍えるホームレス

言うまでもなく、ワシントンは「ハワイトハウス（大統領官邸）」を擁する国際政治の中心地である。「白亜と緑の公園都市」というキャッチフレーズが示すように、町の景観は威厳と美しさに満ちている。政治の町であるばかりでなく、美術館や博物館、劇場、広場等、文化施設の充実ぶりも見事である。春には、日米親睦のシンボルである「桜祭り」が盛大に催される。豊富な街路樹は、季節ごとにワシントンの清潔な町並みを美しく彩る。

しかし、ワシントンにはその明の世界とはきわめて対照的な「もう一つの顔」がある。「貧困の中枢」としての町である。最近の調査によれば、ワシントンの貧困率は、州比較で全米の最高値を示した。貧困に区分される世帯が実に二割を上回る。ちなみにワシントンの人口は、黒人が六割以上を占め、群を抜いて多数派である。

私が居住したフォギーボトム地区は、「白亜と緑の公園都市」エリアの一角に位置した。また、四年近く通学したジョージタウン地区も富裕者層が住む文化的エリアだった。両地区とも、人種は白人が圧倒的多数を占め、大学とアパートの往復を繰り返す限りにおいて、ワシントンの「もう一つの顔」は想像しがたい。「貧困の中枢」

昨年八月末、ハリケーン「カトリーナ」がアメリカ・ルイジアナ州を襲った。上陸二日前に避難命令が出されたものの、数万人に及ぶ市民が脱出できないままに被災し、数千人に及ぶ死者が出たとされる。その犠牲者の大半は黒人貧困層であり、災害現場の混乱は、「途上国の難民キャンプ並み」と形容されるほどに悲惨をきわめた。一つの災害が、はからずも浮き彫りにしたアメリカ社会の貧困と人種間格差の問題は、「自由と平等」を理想に掲げるアメリカ社会・アメリカ文明の紛れもない一断面である。私は、一九九二年から九八年まで滞在した首都ワシントンにおいて、アメリカ社会が抱えるこうした矛盾を直に観察し、時として矛盾の内側に身を置く経験をした。

エリアは、観光者向け地図や案内書の類からは完全に排除された世界にあった。

この世界を最初にのぞき見たのが九三年の冬のさなかである。私は、当時受講していた授業のフィールドワークで、「マーズ・テーブル」というホームレス救済活動をするボランティア施設を単独で訪れた。そこは、いわゆる観光エリアのはるか外側に位置していた。毎日、七百人分にあたる食料を調達・調理し、夕刻になると、二台のバンで市内数箇所を巡回し、列を作るホームレスに食事を供給する役割を果たしている。一九八〇年の創設以来、一日も欠かさずにこの活動が続いているという。

取材に訪れた私も、予定外ではあったが、スूप用ジャガイモの皮むきやサンドイッチの袋詰め作業に長時間取り組んだ。実はその前日、記録的な寒波と猛吹雪がワシントンを襲い、公共交通機関は完全に麻痺し、市民の大半は外に一步も出ることができな



ワシントンの春を賑わす「桜祭り」



ハワード大学の日本語クラスの学生

かった。そんな日にも任務がきちんと遂行されたとの話を聞き、しばし仰天した記憶が残っている。

当日の地元紙は、「マイナス二〇度（摂氏）」を下回る気温を耐え忍ぶホームレスたちの姿を伝えていた。その記事によれば、ワシントンには一万人以上のホームレスが存在する。仮眠が可能なシェルターもあるが、ベッド数は三千個に満たない。「製氷室に指を入れた時の冷たさ、それを夜通し体ごと味わったよ」。そんな痛々しいコメントの数々が載っていた。

●「アーバン・ゲットー」という病根

一九六三年、ワシントンで行われたキング牧師による「私には夢がある」の演説はアメリカの新時代を切り開いた。以降、公民権運動は勢いを強め、それまでの黒人差別のあり方に対する猛省をアメリカ社会に

促した。種々の差別は撤廃され、黒人の地位向上を促進する法的措置が次々に導入された。アメリカが、「自由と平等」という建国の理想に向けて、偉大なる進歩の歴史を刻んだことは疑いない。

しかし、その進歩とは裏腹に、「アーバン・ゲットー」（都市の貧民住居区／スラム）という抜き差しならない状況が生み出されている現実を見逃すわけにはいかない。そのからくりは単純ではないが、背景にあるとされる事情を簡略に説明すると次のようになる。

六〇年代の公民権運動を通して、ビジネス機会を求める大量の黒人が様々な都市に流れ込んだ。白人と黒人の住み分けは依然継続し、経済的成功を収めた黒人は、狭苦しい黒人居住区を抜け出し郊外に移り住むようになる。その移動の累積が、やがて都市の黒人地区の慢性的な人材不足を招くに到った。その影響で学校や教会等の社会的中枢機関の機能が薄れると、黒人コミュニティは歯止めのない崩壊に突き進んでいくことになる。

都市のスラム化が進行すると、白人たちも、目に余る社会問題に自分たちの税が注がれることに難色を示し、より落ち着いて暮らせる郊外に移動する傾向を強める。白人は白人の、黒人は黒人の郊外を首都圏地域にそれぞれ形成し、郊外が膨張していく。その結果、都市全体の人口は急激に減少し、市の財源は破産状態に陥る。ちなみにワシントンは、七〇年代に七十五万人まで膨れ上がった人口が、私の滞在当時、およそ五十七万人にまで減少していた。



ハワード大学の卒業式

一九九六年の夏、市内十三の公立学校が、裁判所により九月の新学期の開講を禁じられるという出来事が起こった。飲み水が不衛生、天井が落ちかけている、窓が割れ放題、行政がでたらめ等の理由が並んだ。うち一校が私の住む近くにあったが、確かに無残な外観を呈していた。ワシントンの公立学校の九割は黒人生徒が占める。すなわち、白人の大半は子供を私立に通わせている。当時のクリントン大統領もまた然りであった。

『子どもたちの戦争』（原著は一九九五年出版）という本がある。レバノン、エルサルバドル、モザンビーク、ボスニアに続いて、ワシントンが取り上げられ、戦争によって「人生を台無しにされている」子供たちの姿が描かれている。ワシントンの「戦争」とは、スラム街の一角にはびこる



現在のゼミ生とともに

ドラッグマーケットの勢力争いをさす。ドラッグの売買に利用され、銃の犠牲になる子供が跡を絶たない。その地域では、学校さえも安全な場所ではないという。

アーバン・ゲッター問題の解決は困難をきわめている。白人と黒人が住み分けをすることににより、人種間の緊張や衝突は表面化しにくい。悪循環の連鎖により静かに蓄積した病根は容易に取り除けるものではない。国際紛争が発生すれば、外国に向いてまでも解決を模索するアメリカであるが、お膝元の首都ワシントンにはびこるこの「戦争」は、今日もおざりにされている。アメリカ政治のアイロニーを感じずにはいられない。

● ハワード大学の思い出

ジョージタウン大学で学業を終えた私は、九六年から九八年にかけて、同じくワ

シントン内にあるハワード大学で日本語を教える仕事に就いた。ハワード大学は、一八六七年、南北戦争を経て解放された黒人の教育のための大学として設立された伝統校である。今日も黒人学生が全体の九割近くを占める。

ハワード大学のあるシヨール地区は、ほぼ一〇〇%が黒人住民である。住宅の窓や玄関に取り付けられた鉄格子、廃墟ビル、破壊されたパーキングメーター、たむろする失業者、そんな町風景を見ながらの通勤であつたが、慣れてしまえばひるむこともなかった。

日本語を教えるという仕事への興味も尽きなかつたが、学生の趣味や経験をダイレクトに知る機会があり、異文化の刺激を味わつた。

当時は、タトゥーがはやつていた。「愛」という漢字を腕に彫りたいから教えてほしい、と聞きに来る学生が何人かいた。漫画描きを趣味とする学生は、日本の少女漫画を片手に「なぜ目がこんなに大きく描かれるのか」と聞いてきた。柔道の地区大会で入賞した学生は、トロフィーをクラスで披露してくれた。彼は哲学専攻で禅にも詳しくかつた。彼との禅談義は私の楽しみの一つだった。

少なからぬ学生は、黒人社会におけるリーダー的存在たろうと奮闘していた。アーバン・ゲッターの不遇な子供たちを教育するボランティア活動に精を出す学生は、崩壊したコミュニティに育つ子供たちの悲惨さをよく話してくれた。

人種問題に話題が及ぶことも少なくな

い。日本人が黒人を蔑視することに怒りをぶつける学生もいた。「白人は私たちにひどいことをしてきた。だから私も数え切れないほどの悪口を言つてきた。でも、アジア人は私たちに何も悪いことはしてない。だから悪口を言いたくない。友達になりたいと思う。でも、彼らが私たちを嫌っているとしたら、どうしたらいいのか」と、真剣な眼差しで問いかけられた時は、少なからぬ衝撃を覚えた。

総じて、彼らは熱心に勉強に取り組んでいた。一生懸命学ぶ姿は万国共通の要素が多いことを知つた。教えていると、人種が違ふという意識はたちどころに抜け落ち、個人が個人として意識されるようになる。そんな時、心に残る何かを彼らに伝えたい、という意欲が増す。その思いは、敬和学園大学の学生を相手にする今日も何ら変わるころはない。

中村 義実 助教授 プロフィール

● 最終学歴

ジョージタウン大学大学院

修士課程修了

● 研究・演習のテーマ

異文化コミュニケーションと比較思想に焦点を当てて研究を行っている。

ゼミでは、コミュニケーションを異文化理解の観点から考察し、日本人が「国際化」の時代を創造的に生きるための知恵と知性を磨くことに重点を置く。

ふれあい バラエティ

ふれあいバラエティのご報告

敬和ふれあいバラエティは、七月のボランティア実習でお世話になった福祉施設等の方々を招待して開催する、恒例の交流イベントです。一昨年度からは、学生による「ふれあいバラエティ実行委員会」が主体となつて企画・運営を行っています。

今年は去る十月二十一日に、体育館（パーム館）を会場にして実施しました。実行委員会を中心とした、まさにバラエティに富んだ多くの学生たちが、一三五名のお客様と一緒に楽しい一時を過ごさせていただきました。

学生たちはこの日のために二ヶ月近くの間、一生懸命準備に励んできました。苦労もありましたが、施設の方々に喜んでいただいたことが何よりのご褒美になったようです。暖かい共生の思い出は、学生たちの心の奥にいつまでも残ることでしょう。

（ボランティア・センター）



施設の方々と楽しく交流

「ふれあいバラエティ」を終えて



ふれあいバラエティ実行委員長

山田 華代

私が、「ふれあいバラエティ」の企画・運営に携わつてから、早くも三年が経ちました。はじめは、不安や心配ばかりでしたが、今では施設の方の喜ぶ顔を思い浮かべながら、楽しく準備や作業をできるまでになりました。とはいっても、一五〇人近い招待客、三〇人以上のボランティアスタッフを動かすことは、とても大変なことでした。二ヶ月前から毎日必死に作業をして、当日に臨みました。

できるだけ、たくさんの人に伸び伸びと楽しんでいただけるようにと思い、今年は初めて体育館で行うことにしましたが、広い会場でたくさんの人を動かすということは、考えていた以上に難しく用意していたゲームも限られた時間の中で全てを行うことができませんでした。それでも参加してくださった方は口々に「ありがとう」「楽しかった」と言ってくださり、それが何よりも嬉しく感じました。失敗もあり、完璧といえる「ふれあいバラエティ」ではありませんでしたが、施設の方々のとても楽しそうな顔を見ると、こころの中が達成感や充実感が満たされていくようでした。

私にとっては、最後の「ふれあいバラエティ」となりましたが、これからも「ふれあいバラエティ」がよりよく形を変えながら、長く続いていくことを願っています。

みんなで自由に過ごせた時間



国際文化学科一年

門口 啓

私は学生ボランティアとして「ふれあいバラエティ」に参加しました。ボランティアといっても特別な仕事はなにもなく、遊びに来てくれたいろいろな施設の方たちとお話をしたり、一緒に歌ったり踊ったりと、とても楽しく自由に過ごしていました。

ハロウィーンの時期ということで、私たち学生はみんな仮装をしていたのですが、参加者の皆さんが予想以上に喜んでくださったので驚きました。特に人気だったのは「マツケンサンバ」の仮装をして踊りを披露した友達三人と、お笑い芸人「レイザラモンHG」そのものになりきって出し物をした先輩です。先輩が踊ったり、物まねをしたりするたびに会場が沸き騒がれていたのも、とても羨ましい感じがしました。

ふれあいバラエティは大成功に終わったと思います。なぜなら、参加者の皆さんが口々にお礼を言つて帰られたからです。イベントが終わつてみんなで後かたづけをした後は、ちょっとした達成感を味わうことができました。友達に半ば強制的に誘われて参加した私でしたが、これまでとは違うふれあいの形を体験できてよかったと思っています。皆さんの中で、こういったイベントに少しでも興味のある人は、参加してみたいかがでしょうか。きっと、新しい体験ができますよ。

敬 和 祭

敬和祭のご報告



敬和祭実行委員長

大江 寿賀子

十月二十二、二十三日第十五回敬和祭が行われました。今年はとても寒く、天候には恵まれませんでしたが、多くの方々に
お越しいただき、大成功に終わりました。

今年度は、Peace & Unity（平和・調和・敬和）のテーマのもと昨年度から始まったミュージック・フェスティバルや三組のアーティストによる豪華なライブなどを行いました。構内は両日ともたくさんの方の熱気で賑わい、時には外の寒さを忘れてしまうほどでした。

今年も協賛いただいた企業の方々をはじめ、多くの皆さまのご支援とご協力を受け、楽しい敬和祭を開催することができたことを心より御礼申し上げます。



ミュージック・フェスティバル（東豊小学校）

大成功だった「豚汁屋」



英語英米文学科三年

貝沼 梢

私たち北嶋ゼミは、敬和祭で豚汁屋を開き、豚汁一杯とおにぎり一つのセットで三百円で売り出しました。いろいろありましたが、みんなの協力の甲斐あって完売し、私たちの屋台は大成功を収めました。

ここまでくるまでに、ゼミのみんなで何度も話し合いをしました。まず、何を作るのか、どのようにして売るのか、金額の設定はどうするのかなど、話し合うことが多くて思うように進まず、途中で嫌になることもありました。何とか敬和祭の当日を迎えることができました。

屋台の仕込みは、保健所の指導により当日にしかできないので、私たちは朝早く大学へ行き、みんなで大量の材料を仕込んで、屋台を開店する準備を整えました。その日は肌寒かったのですが、あつたかい豚汁はもしかしら結構売れるんじゃないかなど期待しました。お昼が近づいてくるとたくさんの方が次々とやって来ました。豚汁は本当に飛ぶように売れて、大きな寸胴鍋に七〇人分作っておいいた豚汁があつという間に底を尽きそうになりました。それと同時に一緒に売っていたおにぎりもなくなっていました。

お米の仕込みはとても間に合わないの
で、まずは汁単体で売ることになりました。
時間を見るとまだ午後一前。「閉店する



大盛況だった「豚汁屋」

にはまだ早いし……」そう思った私たちは急ぎ、早く火が通っておいしいけんちん汁をつくることを思いつき、新たに買出しに走りました。すると、またもやたくさんの人たちが買ってくださいました。中には二度も買ってくださった方がいました。「いやあ、本当においしいよ」と、笑顔で言うてくださったのがとても嬉しく、今までの苦労が報われた気がしました。そうしているうちに閉店時間となり、鍋には何も残らず私たちの今年の敬和祭は幕を閉じました。

屋台を出すまでは色々々と面倒なこともあり、朝も早く、正直嫌だなど思いましたが、自分たちのつくったもので多くの人を笑顔にできたのは大変うれしく、快感であると思えました。来年もまたみんなで屋台を出したいと思えます。

行事

外国語スピーチ・コンテストのご報告

敬和祭二日目の去る十月二十三日、国際文化学科長杯「第一回外国語スピーチ・コンテスト」を開催し、予想以上の盛況のうちは無事終了することができました。

この大会には当初の予想を超える二十四名の応募があり、中・高校、大学、社会人の三部門に分かれて、英語、コリア語、日本語によるスピーチが行われました。会場には百名余の皆さんにお集まりいただき、最後まで出場者のスピーチを熱心に聞いていただきました。優勝は、中・高校生の部・コナライさん（新潟西高）、大学生の部・平松霞林さん（敬和学園大）、社会人の部・平山美果さんでした。また、来場者からのアンケートでは「とても楽しかった」、「来年も開催して欲しい」との感想をいただきました。

なお、この大会は財団法人中島記念国際交流財団の支援も受けました。ここに深く感謝申し上げます。
(国際交流係)



中・高校生の部優勝 コナライさん

“挑戦”



科目等履修生

桑山 幸三

このたびのスピーチ・コンテスト参加は女房に背を押されてのことであった。二位入賞（社会人の部）は望外の喜びである。その晩は二人でワインで乾杯し、ステーキを食べた。

実は、スピーチ・コンテストは今回で二度目のことである。初回は四十八年前の大学一年生のときである。月刊誌「中央公論」の編集後記をそのまま引用し、その上、英語も大部分で先生のものとなった。懸命な暗誦にもかかわらず、本番では汗のしたたる原稿の棒読みに終始した。まことに無念であった。

今回は、遠い昔日のこの苦い経験を踏まえて、自分の体験に基づき本当に主張してみたいことを自分の英語で挑戦した次第である。暗誦は、運転中、風呂の中など精一杯やった。その結果、当初予想を超える出来となったかと思う。

スピーチを終えたあと、先生をはじめ数人の方からお褒めのお言葉を頂戴した。実にうれしかった。また不思議と回りの人々への感謝の念がわいてきた。ご指導いただいた、またいただいている敬和学園大学のフランク先生、ジェンキンス先生、そして金山先生に感謝申しあげる次第である。

キャロリン・グレアムセミナー&チャリティ・コンサートを終えて

十一月二十三日、英語教育におけるジャズチャンツの創始者キャロリン・グレアム先生をお迎えして、新潟市内でセミナーとコンサートを開催しました。

セミナーでは、ニューヨーク大学時代の日本人留学生との授業模様や、ジャズチャンツというアイデアを得たきっかけなどをユーモラスにお話しされながら、様々なチャンツを、実践して紹介されました。ジャズチャンツを教師がポケットに入れておく一つの道具として使ってほしいという言葉が印象的でした。コンサートでは、ピアノにあわせてみんなで歌ったり、子どもたちがステージで踊ったり、本学の外山節子先生の授業の履修生による歌の披露があったりで、「キャロリン・ワールド」に浸った楽しくも贅沢な一日となりました。

(英語文化コミュニケーション学科 金山)



楽しく実践的なお話 (万代市民会館)

授業紹介

人気授業をサーチする

「日本近現代史」

国際文化学科の専門科目「日本近現代史」の担当は、『銃後史ノート』一〇巻および『銃後史ノート戦後篇』八巻の編纂、『女たちの（銃後）』、『天皇制とジェンダー』などの著者で知られる、加納実紀代教授です。授業では、日本の社会に深く浸透している『男らしさ、女らしさ（ジェンダー）』がどのように形成されたのか、それが日本の戦後史に果たした役割と問題点について、活字だけでなく写真やビデオ映像などを使い検討しています。近年、皇室典範の見直し、女性・女系天皇の容認等が政府レベルで議論されていますが、近代天皇制についても、ジェンダーの視点で読み解いていきます。



学生の中に入って行われる授業

「日本近現代史」の授業風景



国際文化学科二年

高橋 ゆき

加納先生の講義はいつも新鮮で、学生の参加を大切にしています。まず、学生たちの前回の授業についての感想を読み上げます。時々鋭い意見はとっとする瞬間があれば、留学生の意見を聞いて、ダイレクトに世界の中の日本を感じることできます。

内容は多岐にわたり、性同一性障害、ジェンダーの視点から見た戦前・戦中・戦後の日本、憲法改正問題や、靖国問題、天皇制、ウーマンリブについて資料やビデオを見ながら解説していきます。グローバルな視野で授業を進め、身近なトピックを通して、ローカルな視点で学生たちに理解を促します。例えば憲法改正問題。世界はどう見ているか新聞記事を見ながら解説し、もし憲法が改正されたら、わたしたちの生活がどう変わるかについて具体的に論じます。徴兵制が復活するかもしれないと聞いたときはドキッとしました。

「日本近現代史」の授業は、物の見方、考え方に確かなヒントを与えてくれます。軍国主義もジェンダーも意図的に作られたものだとわかりました。以前は当たり前だと思っていた平和な生活も、自分たちが意識して守らなければ簡単に崩れてしまう。そのことをしっかりと念頭において、これからの国際社会、日本の行方を見通して行きたいと思います。

加納実紀「戦後史とジェンダー」のご紹介

本年八月に上梓された加納先生の著書『戦後史とジェンダー』（四六〇頁・三、六七五円・インパクト出版会）の書評の一部を紹介いたします。

この人（加納さん）以前に「銃後史」という言葉はなかった。…まったくの独学で民間女性史をつくりあげてきた。そして誰よりもはやく、女性の戦争責任を問うた。…グローバルな女性史における「歴史の再審」が起きたのが八〇年代の半ば以降であることを考えると、加納さんのこのころみは時期の早さにおいても、その達成においても、国際水準から群を抜いている。…本書に収められたエッセイの数々は、戦後のそのときどきにタイミングを逸さずに発言された、いわば加納さんの「時局発言」である。（後略）

『思想』（岩波書店）〇五年十二月号

上野千鶴子 東京大学教授

本書は著者が戦争の時代の女性のありようを掘り起こした「銃後史」への取り組みから始まり、その連続としての戦後の時代をジェンダーの視点から記録、分析する論集である。…この間の日本社会の政治的経済的大変動を思えば、本書の刊行は時宜にかなったタイミングであったと言える。今日にいたる日本社会の変動はすでに八〇年代には顕在化していたことが本書に収められた論考によって、あらためて確認できる。（後略）

『週刊読書人』〇五年一〇月十四日号

伊田久美子 大阪府立大学教授

中越大震災 から1年

「中越大震災から1年」



国際文化学科三年

小出 香緒里

二〇〇四年十月二十三日に起きた中越大震災から一年、私は地震を経験してからの「不安」に時折襲われる。震源地が実家に近かったために、地震が発生した直後から何度も母の携帯に安否確認のためのメールを送った。返信が返ってこない間の不安は今でも思い出したくない。しかし、母の「家族全員無事」というメールが返ってきたから、三日後に電話で声を聞くまでは安心できなかった。

私は新発田にいたために地震の被害を直接受けることなく、いつもと変わらない毎日を過ごしていた。しかし、実家では家族・友人が車の中での避難生活を余儀なく



震災直後の街の様子

され、電気・ガス・水道が使えない中で不便な生活を強いられていた。同じ新潟県内に住んでいる中でこれほどまでに、「現実」というものが違う。当時の自分自身が直面していた「現実」と被災地との違いは毎日ニュースで被災後の状況を確認しているも、地震が本当に起こったのかを信じられないほどに違っていた。私の家族・友人は幸い無事だったが、地震で家族やかけがえない人を亡くされた方は多いと思う。また、被災生活や地震を経験してストレスがもとで倒れていく人々を今もみる。たしかに、震災直後に比べて一年という時間がたてば、倒れていた電信柱は元通りになり、道路の陥没部分は新しいコンクリートで覆い隠されている。しかし、私はいまだに「不安」に襲われる。

あの地震で私は家族を、そして友人を一度失ったと思っている。その「不安」は一年たった今でも消えない。被災した街は元通りになりつつあるが、地震を経験した人々の心から少しでも「不安」が軽くなる日がくれば良いと願う。

教養コンファレンス・レポート

十月七日、開学年度以来の伝統行事である「教養フリレッシュ・リトリート」がおこなわれ、約三十名の学生と五名の教職員が五頭連峰の秋取山ハイキングに出かけました。

秋取山に向かうバスの中では、延原宗教部長の差し入れのおにぎりをいただいて腹ごしらえさせていただきました。息を切らしながらも豊かな自然を堪能しつつ、一時間ほどのハイキング・コースを歩きました。頂上では宗教部長の説教を聞き、讚美歌を歌い、金山先生のリードでゲームを楽しみました。四時間ほどの短い遠足でしたが、新しい友との交わりがあり、山頂から見下ろす景色を眺めながら通常の生活では味わえない新鮮な発見がありました。

参加した学生たちはその経験に基づく思索をそれぞれレポートにまとめました。

(キリスト教と教育委員会)

ぼちぼちいこか新潟

、一昨年12月のインドネシア・スマトラ沖のハリケーン被害で120万世帯が被害を受け、以上の死者が出ました。

、中越大震災の記憶は埋もれてしまうのでよりも遅れています。被害が大きいだけに映像に難くありません。そんな中、支援団体をしたことを知りました。焦らず、気長にやが込められています。被災者の方々の重荷を援をしつづけることが「共に生きる」とい(事務局長 宇田川)



自然の中を散策

中越大震災 から1年

新潟県中越大震災から1年

中越大震災から一年以上が経ちました。この地震で20万人の死者を出し、8月のアメリカ南側、さらに10月のパキスタン北部地震では7万
次々と起きた大災害の中で我々の感覚が麻痺はないかとさえ思えます。復旧工事は当初の計原状復帰までの道のりは遠く、被災者の焦りはとして「ぼちぼちいこか新潟」実行委員会が発ってください。応援していますよとのメッセージを共に担い、少しずつでいい、多くの人たちがう敬和の姿勢を表すことだと思ひます。

「小千谷の今、そしてこれから」



教務課教務係長

船岡 芳晴

私の実家は小千谷市平成二丁目（俗称・寺町）にあります。寺町は地震後に避難所となった私の母校でもある小千谷小学校から至近の距離にあります。この小学校のグラウンドには今も仮設住宅があり、多くの被災者の方々が暮らしています。このまちは十五軒程度からなる商店街を中心としています。今回の地震では、この商店街の内、五軒が建て直しをし、二軒が廃業となりました。私の実家の建物も、一部全壊指定を受けましたが、現在は修復工事もほぼ終了しました。

表面上は復旧が進んでいるように見受けられますが、専門家の調査によると、地震

後二泊以上車中泊をした人の中に、エコノミークラス症候群の後遺症である静脈血栓が一年経過して足から肺に移動し、肺血栓を起こす症状が見受けられる人もいるとのこと。また、小千谷でも避難施設の少なかつた地域にその割合が高いとのこと。このような話を聞き、災害復旧が終わっていないどころか、人の体の中に災禍を残していることが分かり、改めて地震の恐ろしさを痛感しました。

郷土の大先輩であり詩人、また慶應義塾大学で教授をつとめた西脇順三郎の詩で小千谷を謳ったものの一節に、「山あり河あり 暁と夕陽とが 綴れ織る」とあります。この詩のように、小千谷は山間地にある起伏に富んだ美しい小さなまちです。

この小千谷市や川口町、長岡市など地震で被害を受けた地域の人々の生活が元に戻るにはしばらく時間がかかることと思われませんが、一日も早く心身ともに健やかに過ごせる時が来ることを願っています。



慈眼寺（寺町）修復の様子

一・二年生保護者懇談会のご報告

去る十一月五日、六十五名の保護者の皆さまを本学にお迎えし、「一・二年生保護者懇談会」を開催いたしました。

第一部では本学の教育内容について、新井学長と上野教務部長が「敬和学園大学の教育」と題してお話ししました。その後、授業の履修方法などについて活発な質疑応答が行われました。

引き続き行われた第二部は立食の懇親会形式で、保護者のみなさまと常日頃アドヴァイザーとしてお子さまと接している本学教員との間で、学業成績や今後の学生生活などについての意見交換を行うことができました。

みなさまからいただきましたご意見は今後の参考とさせていただきますと共に、貴重な時間を過ごさせていただきましたことに感謝いたします。
(教務委員会)



家庭や大学での様子を情報交換

15周年行事

創立15周年記念セミナー

「住民参画型のまちづくりを考える」ご報告

敬和学園大学が創立十五周年を迎え、紫雲寺町と加治川村と合併して新・新発田市が誕生した記念すべき今年、敬和学園大学・新発田市共催のセミナー「住民参画型のまちづくりを考える」が、新発田市地域交流センターを会場に、去る十月十五日に開催され、盛況のうちに終わりました。

記念セミナー第一部の記念講演1では、日本地域福祉学会会長で日本社会事業大学学長の大橋謙策先生をお招きし、「住民参画型の福祉まちづくりの現状と課題」を講演していただきました。その中では、「住民参加の福祉まちづくり」ではなく、「住民参画で福祉まちづくり」の重要性を強調し、新発田市の今後の課題や本学の地域貢献のあり方についても方向性を示していた

学 創立15周年記念セミナー
参画型のまちづくりを考える
新発田市の福祉まちづくりと大学の地域貢献を探る～



熱のこもった講演（大橋先生）

いただきました。記念講演2では、新発田市長の片山吉忠様より、「新・新発田市のまちづくりのあり方と課題」をテーマに福祉のみでなく、まちづくり全体の構想について、今後の事業展開を含めたご講演をいただきました。

さらに、第二部のシンポジウムでは、住民参画による福祉まちづくりの先進地域である山形県鶴岡市から難波貢様をお招きし、住民参画の具体的な事例が紹介され、今後の新発田市における住民参画のあり方に多くの示唆をいただきました。また、行政の立場から新発田市保健福祉部長の青山武夫様から新発田市の取り組みと課題を報告していただきました。民間の立場からは新発田市のまちづくりに長年携わってきた神田敬一様からのこれまでの生々しい実践を語っていただきました。そして最後には、大橋謙策先生にシンポジウムの総括コメントをいただき、第一部の内容を踏まえたより具体的なアイデアを提言していただきました。

このセミナーで「住民参画型によるまちづくり」の具体的な課題と「大学の地域貢献の方向性」が提言されたことは、新発田市や本学にとって大きな成果でした。新発田市、社会福祉団体、本学さらに地域住民が参画して新発田市の「福祉でまちづくりビジョン」を具現化していくことが大切です。このセミナーに共催してくださった新発田市、後援してくださった新発田市社会福祉協議会、新発田商工会議所、新潟日報社、その他の関係者の皆さまに心よりお礼を申し上げます。（共生社会科学科 趙）

創立15周年記念講演

「あなたは戦争を知っているか」ご報告

戦後六〇年の今年、人文社会科学研究所は、講師に若桑みどり先生（川村学園女子大学教授）を迎え、薄れゆく戦争の事実を思い返し、私たちの行く末を考える講演会を、十一月十二日に開催いたしました。

若桑先生は大教室を埋め尽した二三〇名余りの聴衆を前に、当時の史料を駆使して「肉弾三勇士」神話化の過程を再現し、婦人雑誌や映画などあらゆる文化ジャンルで扇動が行われ、民衆が抜き差しならぬ戦争への道へ追い込まれていった状況を明らかにされました。第二部では本学の加納実紀代先生が聞き手となつて、若桑先生が会場の質問に答える形で改憲問題等に熱弁をふるわれ、会場は終始熱気に包まれました。

なお当日のレジュメに誤植があり申し訳ございませんでした。この講演はブックレットとして公開されます。ご希望の方は研究所事務局までお申し出ください。

（人文社会科学研究所長 桑原）



大観衆の熱気に包まれた会場

オープン カレッジ



語り部のお話に聴き入る観衆の皆さん

今年度の大学オープン・カレッジでは創立十五周年を記念して二つの連続講義を開催いたしました。六月の坂東克彦弁護士による「阿賀の流れに」と題した新潟水俣病についての講演・実地見学（カレッジ・レポート第四十三号に掲載）に続き、十月には新潟大学名誉教授・本学前理事の真壁伍郎先生が『いまに生きる昔話』という題でグリムの昔話を中心に三回にわたる講義をされました。

真壁先生は常々「一つのことじつくり取り組み、それを深く、さらに深く学ぶ」ことの大切さを語られ、先生のご尽力で、大学オープン・カレッジでは「子ども」をキーワードに、絵本や美術史の専門家を本学にお招きし、数回の週末を使って一つのテーマをしっかり学ぶ機会を地域の方々に提供できるようになりました。

二〇〇五年度オープン・カレッジの報告

今回の講義の特色は先生が「語り部」を招かれたことです。「語り部」として広く活躍しておられる新潟市在住の伊藤美智子さん、小林義臣さんが「かえるの王様」、「池のそばのがちよう番の娘」、「ホレおばさん」、「マレーン姫」、「忠臣ヨハネス」等の全編をみごとに語られ、受講生は「耳をかたむける」ことがどれほど自分の内なる世界を広げてくれるのかを実感しました。

「語り」を軸に、「グリムの昔話とはどういうものなのか」に始まり、「時はどう流れるのか」、「人生の四季」、「愛と憎しみのなかで」、「運命と向き合う」、「生と死をこえて」など、グリムの昔話が教えてくれる私達の人生に関わる事象について、映像や音楽をふんだんに用いながらの真壁先生の講義は会場一杯の受講生にとってもことに贅沢な学びの機会でした。（広報委員長 松崎）

<2005年度 オープン・カレッジ>

<大学>（敬和学園大学）

「阿賀の流れに-新潟水俣病への40年の思いを語る-」 坂東 克彦 弁護士
6月18日（土）、6月19日（日）の2回（2日目はバスツアー）
登録者数：68名
「いまに生きる昔話 -グリム・メルヘンの世界を楽しむ-」 真壁 伍郎 先生
10月1日（土）～ 10月22日（土）の3回
登録者数：148名

<新潟田市>（新潟田市生涯学習センター）

「民族、宗教、国家を超えて-共存する社会、共生する社会-」
6月16日（木）～ 7月21日（木）の6回
登録者数：118名

<聖籠町>（聖籠町町民会館）

「いのち、ひと、生活」
10月4日（火）～ 11月1日（火）の4回
登録者数：28名

<新潟市豊栄地区>（新潟市豊栄地区公民館）

「ことば、社会、コミュニケーション」
6月8日（水）～ 7月13日（水）の6回
登録者数：37名

たくさんのご参加ありがとうございました。

寄付者ご芳名

- | | | |
|-------|---|-----------------|
| 一 | 般 | 河上 正義 |
| | | 北垣 宗治 |
| | | 真壁 伍郎 |
| | | 村松 信雄 |
| | | 野本 寛子 |
| | | 小川 文勝 |
| | | 鷹澤 昭一 |
| | | 新潟教会 婦人会 |
| | | 新潟YWCA |
| | | 敬和学園大学 後援会 |
| | | 新井 明 3 |
| | | 一九九一組 皆川 靖 |
| | | 一九九二組 長谷川 義水 |
| | | 一九九四組 宮崎 寧子（山本） |
| | | 一九九五組 岩村 忠輔 |
| | | 一九九七組 有澤 未欧 |
| | | 中村 尚子（古澤） |
| | | 渡邊 佳寿美 |
| 二〇〇一組 | | |



本学にお寄せいただいた皆さまのご支援・ご厚意に心より感謝申し上げます。

お知らせ

「まろきオープン」「まろカフェ」

新発田市の商店街のまん中「まろの駅」にて時々「まろカフェ」がオープンします。学校帰りの中・高生達がぶらりと立ち寄り、敬和学園大学の英語教員と一時間ほど英語でおしゃべりを楽しむという企画です。

十、十一月の月、水曜日の夕方になると学校のポスターを見て、友達に誘われて、日報で見てと中・高生達がまろの駅にやってきました。多い時には参加者が十三人にもなる賑やかで楽しい会になりました。

二人組みになり英語を使って質問をしたり、グループ対抗のゲームをしたり、「学ぶ」というよりは英語を使ってコミュニケーションを楽しむという、英語が身近に感じられる時間です。お菓子やコーヒーを片手に初めての参加者も和気あいあいとおしゃべりに参加。期間限定の開催でしたが、もっと続けて欲しいとの声がいっつも上がります。敬和を町なかによつぷり出前する、なかなか好評の「まろカフェ」です。

(総務係)



和やかに英語でおしゃべり

二〇〇六年度八学試験中間報告

二〇〇六年度推薦入試が、去る十一月十九日(土)に実施され、指定校推薦Ⅰ、指定校推薦Ⅱ、公募推薦合わせて九十五名が受験しました。この推薦入試については厳正な審議の結果、合否が判定されました。

また、AO入試も順調に進んでおり、現在までに二十四名の合否格が決まっています。

これから一般入試が実施されます。皆さまのお知り合いに大学進学を考えている方がいらしたら、ぜひ本学をお勧めいただき、お気軽に入試室までご連絡いただけますようお願い申し上げます。

(入試委員会・入試室)

2006年度入試日程

入試区分	出願期間	試験日	試験会場	選抜方法
AO	AOⅠ 6月1日(水)～ 3月31日(金)	随時設定	本学	面談(2回) 出願書類
	AOⅡ 6月20日(月)～ 3月31日(金)			面談(1回) 出願書類
一般	A日程 1月4日(水)～ 1月24日(火)	1月29日(日)	本学、新潟、長岡、 上越、鶴岡、 会津若松	英語、国語 調査書
	B日程 1科 1月4日(水)～ 1月31日(火)	2月5日(日)	本学、新潟	英語、国語より1科目、 調査書
	C日程 1科 2月13日(月)～ 3月9日(木)	3月14日(火)	本学	面接(あらかじり面接が予定されます) 調査書
	課題面接型			
センター	第1期 1月4日(水)～ 2月3日(金)	1月21日(出) 22日(日)		英語、他1科目 (全科目の選択) 調査書
	第2期 2月13日(月)～ 2月28日(火)			
	第3期 3月2日(水)～ 3月22日(水)			

※AOⅠは面談型、AOⅡはオープンキャンパス参加型

入学試験等についてのお問合せは、本学入試室(☎0120-26-3637)までお願いいたします。

学事予告

- ◆ 一月 ◆
 - 六日 講義再開
安藤司文教授 最終講義
 - 十日 卒業論文提出締切
 - 十三日 福王守助教 最終講義
 - 十七日 補講日(二十日まで)
 - 二十一日 大学入試センター試験(二十日まで)
 - 二十三日 後期講義終了
 - 二十四日 後期末試験(二月四日まで)
 - 二十九日 一般(A日程) 入学試験
- ◆ 二月 ◆
 - 二日 TOEIC I P テスト実施
 - 五日 春期休暇(三月三十一日まで)
一般(B日程、外国人(二期、帰入二期)、
社会人(二期) 入学試験
 - 六日 後期集中講義期間(九日まで)
 - 十五日 後期末追試験(十八日まで)
 - 十七日 学内合同企業説明会
 - 二十八日 再試験(三月一日まで)
- ◆ 三月 ◆
 - 一日 蔵書点検のため図書館閉館(十七日まで)
 - 十四日 一般(C日程、外国人(三期、帰入三期)、
社会人(三期) 入学試験
 - 十七日 卒業式
 - 三十一日 学年終わり
卒業謝恩会

キャンパス日誌

10月

- 1日 大学オープン・カレッジ①
講師 眞壁伍郎 新潟大学名誉教授
「いまに生きる昔話」(148名、②:15日、③:22日)
- 4日 聖籠町オープン・カレッジ①(28名)
講師 益谷真 教授 「心の動きとコミュニケーション」
- 7日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑬
説教 ロンドンJCF 盛永進 先生(写真)
「パン五つと魚二匹の奇跡」
教養リフレッシュ・リトリート(秋取山)
(学生30名、教職員6名)
- 14日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑭
説教 延原時行 宗教部長 「イエスの宗教の秘密」
講演 大谷貴子 全国骨髄バンク推進連絡協議会会長
「白血病からの生還」
- 15日 大学創立15周年及び新・新発田市誕生記念セミナー
(新発田市地域交流センター、105名)
記念講演1 日本社会事業大学学長、日本地域福祉学会会長
大橋謙策 先生「住民参画型の福祉まちづくりの現状と課題」
記念講演2 片山吉忠 新発田市長(写真)
「新・新発田市のまちづくりのあり方と課題」
- 18日 聖籠町オープン・カレッジ②
講師 若月忠信 教授
「文学に見る作家の郷土性と生き方」
- 21日 ふれあいバラエティ
- 22日 第15回 敬和祭(～23日)
- 23日 オープンキャンパス④(45名)
第1回外国語スピーチ・コンテスト
人文社会科学研究所徐子峰氏来日記念特別講演会
講師 中国・赤崁学院歴史学科教授、本学客員研究員 徐子峰 先生
「北の玉器文化」(写真)
- 25日 聖籠町オープン・カレッジ③
講師 山崎ハコネ 講師
「高齢者社会がおしえてくれたもの」
- 26日 人文社会科学研究所助成講演会
講師 小泉仰 先生「社会福祉の原型概念」
- 28日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑮
説教 山田耕太 教授 「愛あるところに神あり」
講演 和田献一 部活解放同盟栃木県連合会執行委員長
「人間は存在するだけで尊い」



11月

- 1日 聖籠町オープン・カレッジ④
講師 青山良子 助教授「福祉の人間観」
- 4日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑯
説教 日本基督教団栃尾教会 手束信吾 牧師
「成果主義を超えて」
- 5日 1・2年生保護者との懇談会(大学、65名)
- 11日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑰
説教 矢嶋直規 助教授「恵みによる救い」
講演 前坂和子 先生(写真)
「生命愛しむ死刑囚の短歌」
- 12日 大学創立15周年記念講演会
講師 千葉大学名誉教授、川村学園女子大学教授 若桑みどり 先生
「戦後60年に考える あなたは戦争を知っているか」
- 16日 企業との就職懇談会(ホテル新潟、61社69名)(写真)
- 18日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑱
説教 金山愛子 助教授 「マナの奇蹟」
講演 宮川洋 就職指導室長
「21世紀の経済動向」
- 23日 キャロリン・グレアム セミナー
& チャリティー・コンサート(万代市民会館、136名)
- 25日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑲
説教 北垣宗治 前学長
「ニューエル館のニューエルとは？」
クリスマスツリー点灯式
- 2日 チャペル・アッセンブリー・アワー⑳
説教 永野茂洋 明治学院大学教授
「バルティマイの願い」
講演 久島公夫 学生部長「学生のマナーについて」
- 3日 大学・高校合同クリスマス研修会
- 5日 パキスタン地震復興支援バザー
(新発田市地域交流センター)
- 9日 チャペル・アッセンブリー・アワー㉑
クリスマスコンサート
「独唱 讚美と証し」
地中海ソプラノ歌手 工藤篤子 先生(写真)
- 13日 敬和学園高校生徒によるクリスマス・キャロリング
- 16日 クリスマス燭火礼拝
説教 日本基督教団新潟地区長 熊江秀一 牧師
「クリスマスの旅」
クリスマス・キャロリング(学生10名、教職員9名)
クリスマス・パーティー



KEIWA チャレンジ学生ファイル⑬



英語英米文学科 4年

内山 聖子

『大学生活での貴重な経験』

「楽しかったよ、また来てね」この言葉を聞く度に、私は「がんばろう」という気持ちになります。子どもたちの笑顔は私にパワーを与えてくれます。

私が蓮野小学校で英語を教えるボランティアを始めたのは1年生の後期でした。以前から教育に興味があり、子どもが好きな私は、小学校での英語ボランティア募集の掲示を見て、すぐに「参加したい」と思いました。小学校の昼休みの時間に行き、英語を使ってゲームをしたり、歌を歌ったり、絵本の読み聞かせをしたりしています。毎回ゲームなどを考え、準備することは容易ではありませんが、子どもたちに英語を楽しんでもらうためにがんばっています。

このボランティアの他にもう1つ。私は敬和学園大学のキャラクターデザインの作成を広報委員会から依頼されました。私は絵を描くのが好きですが、趣味程度だったので「デザインなんてできない」と思っていました。しかし、「こんな機会は二度とないかもしれないし、楽しそうだ」と思い、引き受けました。先生方や事務局スタッフの方のお力添えをいただき、キャラクターができあがった時は本当に嬉しかったです。

大学生活でしかできないこと、今しかできないことはたくさんあると思います。私はそういった貴重な経験を通して、多くのことを学び、得ることができました。それも敬和学園大学で出会った多くの方々のおかげだと思います。私のまわりのすべての人々に感謝しています。

敬和学園大学
www.keiwa-c.ac.jp

ケータ付付